

早稲田大学大学院日本語教育研究科

博士学位申請論文概要

論 文 題 目

言語教育における「言語」，「国籍」，「血統」
ー在韓「在日コリアン」の日本語教師の
ライフストーリーを手がかりにー

タ

申 請 者

田 中 里 奈

2 0 1 3 年 2 月

本論文は、言語教育における「言語」、「国籍」、「血統」の関係性を、《「母語」として身につけた「言語」》とそこから想定されうる《「国籍」/「血統」》との間にズレをもつ人々（「母語」として身につけた「言語」が共有されている言語共同体の主要な「国籍」や「血統」を有していない人々）のライフストーリーから考察するものである。

第1章 本研究の目的、背景および構成

近年、多くの「ニューカマー」が来日し、その滞在の長期化や定着に伴い、「母語」として「日本語」を身につけていく人々が増加してきている。このような状況は、これまで素朴に信じられてきた、「日本語は日本人のものである」とする「日本語=日本人」といった図式の再考と解体を今まで以上に強く迫ってくるであろう。しかし、これまでも「在日コリアン」をはじめとする「オールドカマー」が「日本語」を「母語」として身につけてきており、そうした図式は幾度となく解体されるべき状況に置かれてきた。それにもかかわらず、「単一民族神話」（小熊 1995）は広く流布しており、歴史学や社会学などでその虚構性が論じられても、依然として根強く維持されている。

このような状況を鑑み、筆者は、「日本語=日本人」という図式の再考と解体を目指した議論を今まで以上に展開させていく必要があると考えた。特に、「日本語」によって「日本人化」を図ろうとした過去をもち、かつ、「日本語」を教えるという行為からは逃れることのできない日本語教育学という領域においてこそ、批判的検討を重ねていくべきだと考えた。そのためには、「日本語=日本人」という思想の問題を、言語学的に見て「正しくない日本語」を排除してしまう問題としてのみ扱うのではなく、「日本語の話者」として「日本人」のみを想定してしまう思想そのもの、つまり、ある「言語」とある特定の「国籍」や「血統」との結びつきを前提にし、そこに「正統性」や「真正性」を付与してしまう思想の批判へと展開していくことが必要である。そこで、本研究では、《「母語」として身につけた「言語」》とそこから想定されうる《「国籍」/「血統」》との間にズレをもつ「在日コリアン」教師の日本語教育における位置取りに関する語りから、彼らの置かれている文脈を逆照射することを狙いとし、それを通じて、言語教育における「言語」、「国籍」、「血統」の関係性を描き出していくこととした。

第2章 「在日コリアン」教師のライフストーリー研究への視座

第2章ではまず以下の1)～3)の3つの観点から先行研究を概観した。

1) 「日本語＝日本人」という思想の来歴と「日本語＝日本人」批判の諸相：

イ(1996)などをもとに、①近代国家の形成過程において、「言語」と「国民」とを結びつけたものとする「国語」という概念が創出されたこと、②それは、「非日本人」の「日本人化」を試みた帝国主義体制下の日本語教育にも引き継がれていったことを跡付けた。そして、③戦後の日本語教育においても「日本語＝日本人」という図式が引き継がれ、「日本語」を学習する人々に「同化」を強いる側面があるという批判(川上 1997 など)や、この問題に対する実証研究(牲川 2012, 田中 2006, 鄭 2010)が行われてきたことに言及した。しかし、そこで問題化されてきたのは、「非日本人」を「日本人化」する論理やその媒介とされる「正しい日本語」の存在であり、「日本語のネイティブスピーカー」だが「日本人」ではないといった、《「母語」とする「言語」》とそこから想定されうる《「国籍」/「血統」》のズレをもつ人々の存在は等閑視され、十分には論じられてこなかったことを指摘した。

2) 「ネイティブスピーカー/ノンネイティブスピーカー（以下、NS/NN S）」概念

NS/NN S という概念がどのように捉えられてきたのかを Paikeday(1985)や大平(2001)をもとに概観した。近年では、NS＝標準、NN S＝逸脱といった二項対立的な関係性を前提とした批判ではなく、「民族」や「人種」など様々な社会的文脈を踏まえた批判が模索されている(Kubota2009)。だが、日本語教育においては、NS教師として「日本人」が、NN S教師として「非日本人」が引き合いに出されることが多いように、二項対立的に捉えられていること、また、両者の権力関係が考察される場合でも、言語学的観点から見たNS/NN Sの関係性が所与のものとして設定されてしまっていることを指摘した。そこで、従来の二項対立的な図式を攪乱させていく方向性に議論を進めていくためにも、そうした図式が根強く維持されている日本語教育に従事する、二項対立的図式では捉えきれない「帰韓」した「在日コリアン」教師を研究対象とすることに意義があると論じた。

3) 「在日コリアン」教師と韓国の日本語・日本語教育事情

「帰韓」した「在日コリアン」教師を本研究に位置づけるべく、「在日コリアン」の歴史的背景、及び、「在日コリアン」に関する先行研究を概観した。「帰韓」した「在日コリアン」や「在日コリアン」教師に関する先行研究はほとんどなく、統計的にも彼らの存在を把握することはできず、「不可視化されてきた存在」であることが明らかとなった。

以上を踏まえ、本研究では、2つの研究課題を設定した。まず、1つ目の研究課題は、「帰韓」した「在日コリアン」教師とはいかなる経験をもつ人々なのか、彼らのライフストーリーを韓国の日本語教育というフィールドに限定することなく包括的に捉えるということ

である。また、これにもとづき、「日本人のような日本語を」といった目標が掲げられがちな日本語教育という空間における「在日コリアン」教師のアイデンティティとはいかなるものであるのかを捉えるということをも2つ目の研究課題とした。

この際、理論的枠組みとして参照したのは、Hall(1990=1998, 1996=2001)のアイデンティティ論である。「日本人」ではないが「日本語」を「母語」とする「在日コリアン」教師が日本語教育という空間において、周囲からの表象やまなざしのなかで、自己をどのように捉え、位置づけていくのか、といった位置取りを明らかにすることとした。これらを明らかにすることを通じて、「日本語」を「母語」として身につけてはいるが「非日本人」であるということ、すなわち、《「母語」として身につけた「言語」》とそこから想定される《「国籍」/「血統」》との間にズレをもつということの意味に迫り、「在日コリアン」教師が置かれている文脈を明らかにすることとした。

第3章 研究方法

第3章では、本研究で採用するライフストーリー法の歴史的背景や、研究の透明性/妥当性の担保など、研究方法に関して論じ、その後、本研究の調査概要を述べた。

ライフストーリー法は語り手の経験や主観的な意味世界を解釈する研究手法であり、研究蓄積が少なく、公式統計では把握しにくい対象者、明らかにされていない社会的現実を照射するのに有効である。個々の経験や意味づけを明らかにするという研究目的と「在日コリアン」教師という対象に適した手法であると判断し採用した。本研究では、対話的構築主義のライフストーリー研究(桜井 2002)の立場に立ち、語られた内容に加え、語られた形式にも着目し考察するよう努めた。また、アクティヴ・インタビュー(Holstein&Gubrium 1995=2004)を参照し、インタビューという行為を「インタビュアーと回答者が共同で意味を作り出すもの」として位置づけた。なお、研究の透明性/妥当性を担保するためには、こうしたインタビューの相互行為と調査過程を開示することとした。また、フィールドワークの暴力性やライフストーリーを書くことの政治性という問題にも触れ、「研究協力者を客観的に捉える」だけでなく、研究協力者との間の様々なせめぎあいなど、「調査するわたし」の経験にまで広げて記述することにより、この問題に向き合うという方針を立てた。

次に、調査概要を述べた。インタビュー調査は韓国において2009年9月～2011年10月にかけて行われた。約1週間の集中的な調査を8回実施し、「在日コリアン」2世の教師7名、3世の教師11名から、一人につき1～4回(各1.5～5時間程度)語りを聞き取った。

第4章 《「言語」》と《「国籍」/「血統」》のズレと教師たちの「戦略」が意味すること

第4章では、具体的に「在日コリアン」教師V, L, E, Dの4名のライフストーリーを【事例1～4】として提示し、教師たちの語りとそれに対する筆者の解釈を記述した。

【事例1】－「カテゴリー」を「戦略」的に利用する教師V

普段の実生活では、「在日コリアン」という「カテゴリー」が自分に付与されてしまうことを否定的に捉え、「カテゴリー」そのものに対して懐疑的な立場をとっている教師Vの事例である。このような立場に立つ教師Vだが、日本語教育の現場においては、「在日コリアン」という「カテゴリー」をむしろ積極的に表明していた。彼女は、韓国籍・韓国名で日本語教育に携わっている教師であるため、「国籍」や「血統」という観点から「非日本人」と見なされてしまい、「日本語のネイティブ」として十分な評価が得られにくいという現実と直面していた。「日本語のネイティブ」でも、「日本国籍や日本名をもたないこと」により、「正統な日本語のネイティブ」として見なされないことがあり、それに対する葛藤や困難に苛まれていたのである。しかし、そうした周囲のまなざしから逃れるために、「在日コリアン」という「カテゴリー」を「戦略」的に見せ、「日本人」により近い存在であることを示すことで、韓国名だが「正統な日本語のネイティブである」ということを表明し、日本語教育のなかでの自身の位置を何とか確立させようとしていた。

【事例2】－「国民」・「言語」の枠組みの脱構築を目指す教師L

「韓国にも日本にもどちらにも完全には属したくない」というアイデンティティ表明のために、自身の属性や名前を「戦略」的に「利用」という立場をとっている教師Lの事例である。彼は、「本名の姓[김(キム)/金]」＋「本名を日本語読みしたものをハングル表記した名（本名の名[실(シル)/実]ではなく、日本語読みした미노르（みのる）/実）」を使用し、自分の【国籍は韓国】だが、【韓国系日本人】だと名のついていた。その背景には、「【ネイティブ先生】であるのに、そうではないと誤解されてしまうこと」を回避し、「【ネイティブ先生としての商品価値】を証明する」という意図があった。しかし、その一方で、そうした名前の使用は、「日本語」が「日本人」によってのみ話されている言語ではないこと、「言語」の境界も、「国民」の境界ももっと混沌としているものであること、そして、その関係も1対1で結びつくようなものではないといったことを学習者に提示したいと考える教師Lの教育理念の根幹とも密接に関わっていた。

【事例3】－「日本語」を「言語資本」として意識する教師E

日本ではほとんど通称名のみで生活し、「在日コリアン」であることを20数年間隠し

て生きてきた教師Eの事例である。教師Eは就職以後、本名で生きることを選択して過ごしてきたが、韓国で日本語教育に携わるようになったのがきっかけで、再び通称名を使う生活に逆戻りしたと語っていた。彼女は日本語教育の現場では通称名を、大学院では本名を名のるといった二つの名前を完全に使い分ける生活を送っているのである。しかし、このような名前の使い分けは、教育機関側からの要請があったからだけではなく、「日本語のネイティブ」なのに韓国名を用いているのはなぜか、「非日本人」なのはなぜか」などといった経歴に関する説明要求から逃れるための手段でもあった。また、「日本語」を「言語資本」として考える教師Eには、その資本がもっとも評価される形態で自己を見せる必要もあった。このような名前の使い分けによって、教師Eは日本語教育という空間において「十全」な「日本人」を装うことができ、「日本人＝日本語のネイティブ」教師の位置を取ることに成功してきたのである。

【事例4】－「日本語話者」の多様性を「したたか」に示す教師D

日本ではほとんど通称名を用いたことがないのに、韓国の日本語教育において通称名を使用しなければならない状況に立たされている教師Dの事例である。教師Dは、学期開始時には教育機関側からの指示どおり、通称名を日本語教育の現場で使用し、「日本人教師＝日本語のネイティブ教師」として教師Dを見るように学習者を誘導してきたという。しかし、学期中盤で「日本語のネイティブ」だが「韓国籍」であること、「在日コリアン」であることを【カミングアウト】し、自身を【完全な韓国人でもなく、日本人でもない】教師として位置づけようとしてきた。日本語教育を単なる「日本語」を教えるだけの営みとして捉えているわけではない教師Dは、このようにすることで、「日本語話者＝日本人」ではなく、多様な人々によって日本語が共有されている現実を示すことを目指してきた。雇用先から一方的に使用することを言い渡された通称名を「したたか」に「利用」することで、教師Dは日本語教育における独特な位置を確保しようとしてきたといえる。

以上の4名のライフストーリーは、「帰韓」や日本語教師になるまでの経緯、日本語教師としての働き方、日本語や日本語を教えることに対する意味づけ、日本語教育に携わる際の名前の使用やそれに対する考えなどの点で大きく異なっていた。だが、「在日コリアン」という「カテゴリー」の明示化や通称名使用という「戦略」を用いることによって、「日本語のネイティブ」としての位置を確保してきた(させられてきた)点は共通していた。

名前には、「自分が自分であって他の誰でもない」ことを示す一方で、「自分がどこに帰

属しているのか」を示してしまうという性質があるが(田中 1996), こうした名前の性質を「利用」して行われる, 本名か通称名かという名前の選択行為は, 「いかに自分を知らせるか」といった自身の「情報管理/操作」でもある(倉石 2007)という見方が近年指摘されている。教師たちの事例が意味しているのは, 「カテゴリー」や名前を操作的に, 「戦略」的に用いることで, 「日本人」により近いことを示したり, 「日本人っぽさ」を「演出」したりすることが可能になっているということである。また, そうした「演出」を用いることで「日本語のネイティブ」教師として, より価値づけられる現実があるということである。しかし, これらは, 「日本人の日本語」が「正統な日本語」として認識される前提が共有されていない限り成立しえないものでもある。以上のことから, 「日本人性」が付与された「日本語」とそれが依然として重視されているという文脈の存在が明らかになった。

第5章 結論

まず, 先行研究, 及び, ライフストーリーの検討から明らかになったことを概観し, 《「言語」》と《「国籍」/「血統」》の関係性が日本語教育においてどのように立ち現われてくるのか, という観点から議論を整理し直した。従来の研究では, 「正しさ」という観点から「日本語」が評価され, 「正しくない日本語」に対する差別や排除が「日本語=日本人」という図式の問題であると指摘されてきた。しかし, いわゆる「正しい日本語」を話す「日本語のNS」であっても, 「日本人ではないこと」によって, 正統な「日本語のNS」として見なされない現実があるということが明らかとなった。このことは, より正統な「日本語のNS」として「日本人」が評価されうるという「日本語のNS」内部のヒエラルキーと「日本人性」が付与された「日本語」の存在を意味しており, 「日本語」の評価に話者の所属が大きく関わっていることを示しているといえる。このことから, ある「言語」を「母語」として共有している言語共同体の主要な「国籍」/「血統」をもつことが重視される思想が韓国の日本語教育において存在している可能性が読み取れた。[第1節～第2節 2.1.1]

しかし, その一方で, 「日本語のNS」という概念が実は全く実体のないものであることもデータは示していた。【事例1】の教師Vは, 韓国名を用いているがゆえに「日本語のNS」であっても「日本語のNS」から排除されてしまう場合があり, そのことへの苦悩や困難を経験していた。それとは対照的に, 通称名を用いている【事例2～4】の3名の教師たちは, 通称名を使い, 「正統な日本語NS」と「なる/ならされている」ことにより, そうした苦悩や困難を回避していた。このことは, 「日本人」がより正統な話者とされる「日

本語のNS」という概念そのものが、実は必ずしも「日本人」であることを前提に成立しているわけではないことを示している。「単一民族神話」を逆手にとった「なりすまし」ができれば、「日本語のNS」に「なる」ことができるように、「日本語のNS」という概念は、実は「着せ替え」可能な、実体のないものでもあることを意味している。言語学者の定義の比較から、「NS」の実体のなさを指摘した Paikeday(1985=1990)や大平(2001)は、それらが所与のものとして当然視されていることを問題化したが、本研究では時と場合によって「NS」とされたり、そこから排除されたりする当事者の語りと具体的文脈から、「《言語》」と《「国籍」/「血統」》の一体化は「戦略」的に打ち崩せる程度の脆弱な概念であることを明らかにした。《「言語》」と《「国籍」/「血統」》の一体化という概念は未だに支配的ではあるが、何らかの「戦略」を用いることによって一体化を装うことは十分可能であり、このことは、逆接的に、《「言語》」と《「国籍」/「血統」》の一体化という概念の危うさを示しているといえる。《「言語》」と《「国籍」/「血統」》の一体化を兼ね備えていること＝「ネイティブ」という実体のない表層的な“イメージ”が漠然と共有されているに過ぎず、このことは、「ネイティブ」という概念の虚構性を意味しているといえる。また、《「言語》」と《「国籍」/「血統」》の一体化という概念が表層的な“イメージ”として広く信奉されていることが、この問題をさらに際立たせているとも考えられる。[第2節 2.1.2]

次に、より広い視点から教師たちの言語経験や属性が日本語教育の文脈でどのような意味をもつのかを考察した。まず指摘できることは、教師のもつ「雑種」な属性や言語経験は、日本語教育における《「言語》」と《「国籍」/「血統」》の一体化という考え方を揺さぶり、「日本語=日本人」という図式の再考を促しうるということである。自らの属性や言語経験を利用して、「言語」や「国民」の枠組みが実は混沌としていることを学習者に示そうとしていた教師の事例からもその可能性を垣間見ることができた。[第2節 2.2.1]

しかし、筆者が論じなくてはならないとより強く感じたのは、そういった可能性以上に、「雑種」な属性を「単一」のものへと塗り替えさせる圧力が現状では非常に強いということであった。「在日コリアン」教師は、「混沌」とした「雑種」な属性をもつが、それをありのまま見せることで日本語教育におけるポジションが脅かされるという経験を有しており、「日本語のNS」なら「日本人」、「日本語のNNS」なら「非日本人」という図式に収めようとする「単一性志向」の強制力の問題と常に隣り合わせの状況に置かれていた。彼らの中には出自を利用して「単一性志向」に立ち向かおうとする教師もいたが、強制力の強さから、結局、「単一性志向」の方向へと絡め取られてしまっていた。このことは、《「言

語』と《「国籍」/「血統」》の一体化を求める「単一性志向」がいかに根強いのかを示していると考えられる。《「言語」》と《「国籍」/「血統」》との間にズレがある人々に、表面的にはそれらが一体化しているようにあえて装うように仕向けてしまうのは、そこに非常に強い「単一性志向」が存在しているからだといえる。したがって、彼らが「雑種」な属性をもつというだけの理由から、「国家」や「国民」を超越しうる存在だと無条件に「称賛」し、日本語教育に何らかの示唆を与えうると見なししてしまうことは、「単一性志向」が根強いからこそ直面している彼らの困難や葛藤を再び不可視化させてしまうことにも繋がりがねない。なぜなら、教師たちは、その構造のなかで複雑な経験をしたり、「日本語＝日本人」という図式にうまく収まるよう、名前を選択せざるをえない状況に追い込まれたりしてきたからである。このことから、「雑種」な属性に着目するだけではなく、それによりもたらされる困難や葛藤を可視化させていくこと、そして、そのような困難や葛藤をもたらず構造の矛盾を明らかにすることこそ、現時点では意味があると筆者は考える。なぜなら、「単一性志向」の問題は、依然として、その根本から詳細に論じられなくてはならない段階にあるということが本研究を通じて明らかになったからである。[第2節 2.2.2]

次に、フィールドワークの暴力性やライフストーリーを書くことの政治性に向き合うには「調査するわたし」の経験の記述も含めることが重要な意味をもつという第3章での議論を踏まえ、「単一性志向」の問題を「調査するわたし」との関係でまとめた。これを通じて明らかになったのは、教師たちの語りとどこか矛盾を孕んだ筆者の解釈があり、教師たちの真意になかなか到達できない筆者の姿であった。そして、それは、「日本語のネイティブだけれど日本人ではない」という属性さえもっていれば、「日本語＝日本人」という図式を崩していくような実践を、身をもって行えるはずだという「構え」を筆者がインタビューの場に持ちこんでいたことと関係していた。筆者は、教師の語りのなかに、《「言語」》と《「国籍」/「血統」》の一体化という考え方を脱構築していく実践の方向性を見出そうとしていたのである。このことは、「単一性志向」が根強いからこそ、「雑種」な属性を表明することが憚られ、困難や葛藤を抱えたり、一体化を装ったりすることになる教師たちの置かれた状況に対する筆者の想像力が完全に不足していたことを意味する。そして、それは、筆者が「日本語＝日本人」という図式のなかに、ある意味、「安住」しているからこそ成し得てしまったものであり、「単一性志向」の強い空間で《「言語」》と《「国籍」/「血統」》とがズレているということがどのような意味をもつのかということ自体に筆者の理解が全く及んでいなかったことを示している。日本国籍と日本名をもった「日本人」の「日本語

のネイティブ」であり、《「言語」》と《「国籍」/「血統」》が一体化した「単一性」を筆者が兼ね備えていることは、筆者がそのことに価値を置いているか否かにかかわらず、「単一性志向」の根強さに対する理解の不十分さと鈍感さを生んでいた。「在日コリアン」教師たちが「雑種」な属性を隠し、表面的には「単一」な属性をもつかのように演じて(演じさせられて)しまっていることから、韓国の日本語教育という文脈における「単一性志向」の根強さを指摘したが[第2節 2.2.2]、こうした問題は、筆者と切り離されたところに蔓延っているものではなく、「単一性志向」の問題を正面から論じようとしている者でさえも、その問題への鈍感さを抱えもってしまっていた。このことは、この問題がいかに根深く、根強いものであるかということの間接的に指し示しているといえる。[第3節]

次に本研究の意義を、先行研究の検討の際に示した3つの観点から論じた。

まず、「日本語＝日本人」批判という文脈に即して言えば、言語学的には「日本語のネイティブ」だが、「国籍」/「血統」という観点からすると「非日本人」とされる人々の「日本語」をめぐる事例は、言語学的な「正しさ」という形式の問題をあえて脇に置き、「日本語」に付与された「日本人性」の問題に焦点をあてた点に意義がある。この検討から明らかになったことは、いわゆる「逸脱」した「日本語」を尊重しようとしたり、新たな日本語を制度的につくり出したりするだけでは、「日本語＝日本人」という思想の脱構築には直接的には結びつかないということである。排除を生み出す権力構造全体を変えていくための働きかけが必要であり、そのためには、「日本語」という「言語」の評価において、「日本人であるということ」がどのような社会的、文化的優位性を内包しているかを常に問い続けていく姿勢が必要であるということを示した。[第4節 4.1]

次に、「NS/NN S」概念の議論に即して言えば、本研究の事例は、教師の専門性の議論にメッセージを投げかけていると思われる。例えば、“より有利なポジションを獲得するため”に、正統な「日本語のネイティブ」に「なる」べく、通称名を使用している(させられている)教師の事例は、採用や教師の評価に「ネイティブ性」が関わっていることを示しており、教師の資質や専門性を捉える基準が十分には機能/確立していない可能性を意味しているといえる。今後多様な背景をもつ教師がさらに増えていくことを視野に入れ、こうした教師の専門性に関する議論の深まりがより一層必要とされていることを本研究のデータは指し示したといえよう。[第4節 4.2]

また、「在日コリアン」研究の文脈に即して言えば、本研究は、不可視化されてきた教師の言語意識や言語経験、教育経験に光をあて、自分の「母語」だが旧宗主国のことばで

もある「日本語」を旧植民地において教えるという、教師たちの直面してきたポストコロニアル的状况を映し出す 1 つの事例を提示した点で意義があったと考える。また、「在日コリアン」の言語経験やアイデンティティを根拠に「言語」や「国民」が「混沌」としていること、それらの同一性が虚構であることを映し出そうとする先行研究に対して、本研究の事例は、そうした議論の組み立て方が必ずしも成功に終わるものではなく、排除の対象となったり、「単一性」を装う方向へと流されていったりするなど、現実問題としてある一定の難しさがあることも示した。[第 4 節 4.3]

それでは、こうした「単一性志向」の問題は韓国の日本語教育に限ったものなのであるか。本研究では最後にそのことを考察すべく、ドイツ語教育や英語教育などの議論を参照しながら、言語教育における「単一性志向」は韓国の日本語教育特有の問題とは必ずしも言い切れないこと、他の言語教育においても重要な論点とされていることを指摘した。

では、こうした言語教育における「単一性志向」の問題にどのように対峙していったらよいのであろうか。筆者はここで、ヨーロッパの社会統合を背景に構想された複言語主義という思想、考え方について言及し、「単一性志向」の問題を打開する糸口もここに見出せるのではないかと指摘した。複言語主義とは、個人の内部に複数の言語変種が共存していることを尊重し、個人のなかに育まれてきた複数の言語変種を 1 つに統合させた総体として言語能力を捉えるというスタンスをもつものである。したがって、「一国民」、「一民族」、「一言語」を前提とする考え方がベースにある「統一体としての言語」という考え方とは距離が置かれている。福島（2010）によると、「国家－国民－国家語という国民国家イデオロギーとそれに関わる言語の利害関係を解体・再構築」（pp.39-40）するために導入されたのが複言語主義という概念だという。第 2 章 1.1 において論じたように、そもそも「言語」は、近代国家の形成の際に、さまざまな人を同じ「国民」として束ね上げ、国民意識を醸成し、1 つの「国家」を形成するプロセスのなかで重要な装置として機能させられてきたという歴史をもつ。そして、国民国家形成と歩調を揃えながら「言語」の統一化と規範化が進められ、その普及を担ってきたのが言語教育である。こうした「統一体としての言語」には、常に「正しさ」という名の物差しが必要とされ、また、誰をその「言語」の「正統」な話者とするかを規定する基準がつきまとう。しかし、複言語主義が示しているように、複数の言語変種がそれらの境界が非常に曖昧な形で個人のなかに位置づけられ、いわば混成言語のようなものとして認識されていくようになれば、「言語」の「正統性」や「真正性」という考え方からは距離を置くことが可能となるかもしれない。

言語教育は、ことばによる自己表現によって他者との関係構築を支えていくことに主眼を置いた、本来的には、ある個人のなかでの「言語」の複数化を促していく機能をもつものだと筆者は考えている。それにもかかわらず、言語教育は、《「言語」》と《「国籍」/「血統」》の一体化を前提とした、ある「国籍」や「血統」をもつ者にその「言語」の「正統性」や「真正性」を付与してしまうという「単一性志向」の問題を内包しているといった自己矛盾を抱えてきた。それは、国民国家形成に寄与してきた頃の「言語」の思想を内包したままの言語教育が現在でも継続して行われているからであろう。何よりも問題なのは、そのことが、これまで、具体的な文脈を伴って可視化されたり、十分な批判に晒されたりしてこなかったという点である。複言語主義というアプローチを念頭に置きつつ、まずは、“ある「国籍」や「血統」をもつ者に、ある「言語」の「正統性」や「真正性」を付与してしまう”という言語教育における「単一性志向」の問題を徹底的に可視化させること、そして、それを通じて、批判のうねりをつくり出していくことが必要であると考え。[第5節]

最後に、本研究の課題と今後の展望について述べた。「言語」、「国籍」、「血統」の間に複雑な関係をもつ人々は日本国内にも多数おり、今後はこうした人々へのインタビューなどを通じて、「単一性志向」の問題を多角的、重層的に論じていく必要があると指摘した。また、本研究ではこうした問題を脱構築していく議論に関しては筆者の現在の立場を記述したに過ぎず、抽象的なものに留まっているため、今後はより具体的な議論の構築を目指していく必要があると指摘した。筆者は一日本語教師として今後も新たな教育実践を模索していくが、こうした問題は、教室実践の改善のみによって容易にそこからの脱却が見込めるようなものでもない。したがって、日本語を学ぶ人々のもっとも身近にいる者として、日本語教育に直接関係のない人々も巻き込み、「言語」、「国籍」、「血統」の問題を議論の俎上にのせ続けていくことで「単一性志向」に変更を迫ることを目指していきたいと考える。

【引用文献】

- イヨンスク, 1996, 『「国語」という思想—近代日本の言語認識』岩波書店.
- 大平未央子, 2001, 「ネイティブスピーカー再考」『「正しさ」への問い—批判的社会言語学の試み』85-110, 三元社.
- 小熊英二, 1995, 『単一民族神話の起源—<日本人>の自画像の系譜』新曜社.
- 川上郁雄, 1999, 「「日本事情」教育における文化の問題」『21世紀の「日本事情」—日本語教育から文化リテラシーへ』創刊号:16-26, くろしお出版.

- 倉石一郎,2007,『差別と日常の経験社会学―解説する<私>の研究誌』生活書院.
- 桜井厚,2002,『インタビューの社会学―ライフストーリーの聞き方―』せりか書房.
- 牲川波都季,2012,『戦後日本語教育学とナショナリズム―「思考様式言説」に見る包摂と差異化の論理―』くろしお出版.
- 田中克彦,1996,『名前と人間』岩波書店.
- 田中里奈,2006,「戦後の日本語教育における思想的「連続性」の問題―日本語教科書に見る「国家」,「国民」,「言語」,「文化」」『リテラシーズ』2:83-98,くろしお出版.
- 鄭京姫,2010,「二分化された日本語」の問題―学習者が語る「日本語」の意味に注目して―『WEB版リテラシーズ』7:1-10.
- 福島青史,2010,「複言語主義理念の受容とその実態―ハンガリーを事例として」細川英雄・西山教行編『複言語・複文化主義とは何か―ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』35-49,くろしお出版.
- Hall Stuart, 1990, Cultural Identity and Diaspora. In Jonathan Rutherford (ed.), *Identity, Community, Culture, Difference*, 51-59, London: Sage/Open University.
(=1998,小笠原博毅訳,「文化的アイデンティティとディアスポラ」『現代思想』26(4):90-102.)
- Hall Stuart, 1996, Introduction: Who Needs 'Identity?'. In Hall, Stuart. and Paul Du Gay (eds.), *Questions of Cultural Identity*, 1-17, London: Sage. (=2001,宇波彰訳,「誰がアイデンティティを必要とするのか?」『カルチュラルアイデンティティの諸問題』7-35,大村書店.)
- Holstein, A. James and Jaber F. Gubrium, 1995, *The Active Interview*, Thousand Oaks: Sage Publications. (=2004,山田富秋他訳,『アクティブ・インタビュー―相互行為としての社会調査―』せりか書房.)
- Kubota, Ryuko, 2009, Rethinking the superiority of the native speaker: Toward a relational understanding of power. In Doerr Neriko Musha (ed.), *The Native Speaker Concept: Ethnographic Investigations of Native Speaker Effects*, 233-248, Mouton De Gruyter.
- Paikeday, T. M., 1985, *The Native Speaker is Dead!*, Tront: Lexicography. (=1990,松本安弘・松本アイリン訳,『ネイティブスピーカーとは誰のこと?』丸善出版.)

早稲田大学 博士（日本語教育学） 学位申請 研究業績書

[学位論文・学術論文・著書・その他（学会発表等）の順に記入してください]

氏 名 田中里奈 印

(2012年12月19日現在)

学位論文

1. 日本語教育における教育内容の思想的「連続性」の問題－教科書の内容分析から見る「国家」「国民」「言語」「文化」 2005 早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文.

学術論文

1. 田中里奈 (2003) 「「言語文化教育」の意義と課題－「文化」教育に関する意識改革という観点から」『論集 ひととことば』4号, 早稲田大学大学院日本語教育研究科言語文化教育研究室, 31-38頁.
- 2. 田中里奈 (2006) 「戦後の日本語教育における思想的「連続性」の問題－日本語教科書に見る「国家」「国民」「言語」「文化」」『リテラシーズーことば・文化・社会の日本語教育へー』2号, リテラシーズ研究会 (くろしお出版), 83-98頁.
3. 田中里奈 (2006) 「「国家」, 「国民」, 「言語」, 「文化」の結びつき－戦後から1980年代における日本語教科書の内容分析と作成者の論考を中心に－」『早稲田大学日本語教育研究』9号, 早稲田大学大学院日本語教育研究科, 79-91頁.
4. 田中里奈 (2006c) 「戦後の日本語教育における政策の変遷－政策文書の分析を通して－」『日本文化研究』19号, 東アジア日本学会 (大韓民国), 423-439頁.
5. 田中里奈 (2006) 「「ライフヒストリー」を取り入れた日本語作文教育－「個人」の経験により築かれた価値観の再構築を目指して－」『日語日文学』29号, 大韓日語日文学会 (大韓民国), 151-160頁.
6. 田中里奈 (2008) 「教科書を批判的に読む－内容分析を取り入れた日本語教育実践－」『日本文化研究』27号, 東アジア日本学会 (大韓民国), 49-71頁.
- 7. 田中里奈 (2011) 「「カテゴリー」化されることへの拒絶とその戦略的利用－在日コリアンとして生まれ育った在韓日本語教師の「日本語」の意味づけをめぐる語りを手がかりに」『移民研究年報』17号, 日本移民学会, 97-108頁.
- 8. 田中里奈 (2011) 「「日本語＝日本人」という規範からの逸脱－「在日コリアン」教師のアイデンティティと日本語教育における戦略」『リテラシーズーことば・文化・社会の日本語教育へー』9号, リテラシーズ研究会 (くろしお出版), 1-10頁.

著 書

1. 田中里奈 (2011) 「日本語の学習はどのように選択され, 意味づけられたのか－1960-70年代に日本語を学び始めた韓国人日本語教員のライフストーリーからの一考察」『日本語教育史論考第二輯』, 日本語教育史論考第二輯刊行委員会 (編), 147-160頁, 冬至書房.

その他

《学会発表》

1. 田中里奈「戦後の日本語教育における「国家」, 「国民」, 「言語」, 「文化」の提示方法の変遷－日本語教科書の内容分析から－」(口頭発表), 2005 年度日本語教育学会春季大会, 2005 年 5 月 22 日, 於・横浜国立大学 (神奈川) .

2. 田中里奈「戦後の日本語教育における政策の変遷- 政策文書の分析を通して-」（口頭発表），2005年度東アジア日本学会秋季大会，2005年10月22日，於・啓明大学校（韓国・大邱）。
3. 田中里奈「「ライフヒストリー」を取り入れた作文教育-「個人」の経験により築かれた価値観の再構築を目指して-」（口頭発表），2005年度大韓日語日文学会秋季大会，2005年11月19日，於・釜山大学校（韓国・釜山）。
4. 田中里奈「戦後の日本語教育に対するイデオロギー批判の諸相-文献調査から見る目的の「転換」と実態としての「連続性」-」（口頭発表），2006年度東アジア日本学会秋季大会，2006年10月21日，於・朝鮮大学校（韓国・光州）。
5. 田中里奈「戦前から戦後への日本語教育の変遷-長沼直兄の教科書と論考の通時的分析から-」（口頭発表），2007年度東北アジア文化学会，2007年6月16日，於・済州国際コンベンションセンター（韓国・済州）。
6. 田中里奈「「教科書を批判的に読む」という活動-教科書に埋め込まれたイデオロギーへの気づきを促すために-」（パネルセッション『日本文化を教えない海外日本語教育という選択-フランス・韓国・アメリカにおける高等教育機関での実践事例から-』），日本語教育国際研究大会，2009年7月15日，於・ニューサウスウェールズ大学（オーストラリア・シドニー）。
7. 武一美・古屋憲章・坂田麗子・市嶋典子・尾関史・田中里奈「自律的日本語学習の実現に向けて-学びをつなぐポートフォリオとは何か-」（口頭発表），2010年早稲田大学日本語教育学会春季大会，2010年3月20日，於・早稲田大学（東京）。
8. 田中里奈「在日コリアン教師として生まれ育った在韓日本語教師の経験の語り」（口頭発表），第25回社会言語科学会，2010年3月13日，於・慶応義塾大学（神奈川）。
9. 田中里奈「韓国に住む元在日コリアン日本語教師のアイデンティティの葛藤」（口頭発表），第20回日本移民学会年次大会，2010年6月27日，於・立命館大学（京都）。
10. 田中里奈「韓国人日本語教師のライフストーリー」（口頭発表），2010年世界日本語教育大会，2010年7月31日，於・台湾国立政治大学（台湾・台北）。
- 11. 田中里奈「「日本語＝日本人」という規範からの逸脱が意味すること-「在日コリアン」として生まれ育った在韓日本語教師のライフストーリーからの一考察-」（口頭発表），2011年世界日本語教育大会，2011年8月21日，於・天津外国語大学（中国・天津）。
- 12. 田中里奈「日本語教育の現場における通名使用は何を意味するのか-「在日コリアン」教師の語りからの一考察-」（口頭発表），2012年早稲田大学日本語教育学会春季大会，2012年3月24日，於・早稲田大学（東京）。
13. 田中里奈「「在日コリアン」として生まれ育った在韓日本語教師の「名のり」の戦略」（口頭発表），2012年度日本移民学会，2012年7月1日，於・関西学院大学（兵庫）。
- 14. 田中里奈「「ネイティブ性」に関する一考察-「在日コリアン」教師の名のりに関する語りから」（口頭発表），2012年度日本語教育国際大会，2012年8月19日，於・名古屋大学（名古屋）。

《研究会発表》

1. 尹菊姫・田中里奈「「総合」における遠隔教育-2004年度春期，ワセダ・エデュケーション・タイランドとのオンデマンド授業の試み-」（口頭発表），早稲田大学遠隔日本語教育研究会，2005年1月20日，於・早稲田大学（東京）。
2. 田中里奈「戦前・戦中期と戦後を繋ぐ日本語教科書の思想的変遷」（口頭発表），第3回ことばと文化の教育を考える会，2009年3月11日，於・北京外国語大学（中国・北京）。
3. 田中里奈「韓国の日本語教育における「在日コリアン」教師の経験とその存在の意味」（口頭発表），2011年度日本語教育史研究会，2012年3月17日，於・大東文化大学（東京）。
4. 田中里奈「在韓「在日コリアン」日本語教師のライフストーリー-《言語》と《国籍/血統》のズレがもたらすこととそれへの対応-」（口頭発表），トランスナショナル研究会，2012年9月7日，於・名古屋市立大学（名古屋）。

《書評》

1. 田中里奈・牲川波都季（2003）「識字教育と日本語教育を結ぶための文献紹介」『リテラシーズーことば・文化・社会の日本語教育へー』1号，リテラシーズ研究会（くろしお出版），105-116頁（分担箇所：105-109頁，111-114頁）。

《報告書等》

1. 尹菊姫・田中里奈（2005）「総合」における遠隔教育－2004年度春期，ワセダ・エデュケーション・タイランドとのオンデマンド授業の試み『早稲田大学における遠隔日本語教育』，79-98頁，早稲田大学日本語研究教育センター。
2. 田中里奈（2005）「第14章 教育・学習教材分析（ユネスコ）」黒田一雄（編）『文部科学省拠点システム事業「発展途上国における教育セクター分析の手法開発」研究報告書』，http://e-archive.criced.tsukuba.ac.jp/result_data.php?idx_key=898。
3. 田中里奈（2007）「日本語教育の歴史と現状」『日本語教育能力検定試験に合格するための本2008年度版』，122-129頁，アルク。
4. 武一美・古屋憲章・坂田麗子・市嶋典子・尾関史・田中里奈（2010）「自律的日本語学習の実現に向けてー学びをつなぐポートフォリオとは何か」『日本語センター及び日研におけるポートフォリオ実施のための理論と実践』，44-47頁，早稲田大学日本語教育研究センター。

《研究助成》

[研究代表者]

1. 2009年度 早稲田大学特定課題研究助成費 課題名「韓国における日本語教育再開期に関する歴史社会学的研究」，課題番号2009A-960。
2. 2009年度 早稲田大学特定課題研究助成費 課題名「ライフヒストリーアプローチを用いた戦後の日本語教育に関する歴史社会学的研究」，課題番号2009B-334。
3. 科学研究費補助金若手研究（スタートアップ）→研究活動スタート支援（2009～2010年度）課題名「韓国人学習者の日本・日本語への葛藤と受容の経験に関するライフストーリー研究」，課題番号21820054，研究機関：早稲田大学→山口福祉文化大学。
4. 科学研究費補助金（若手研究(B)）（2012～2014年度）課題名「「在日コリアン」として生まれ育った在韓日本語教師のライフストーリー研究」，課題番号24720245，研究機関：山口福祉文化大学。

[研究分担者]

1. 早稲田大学日本語教育研究センター 一般研究（重点研究），課題名「日本語センター及び日研におけるポートフォリオ実施のための理論と実践」（研究代表者：細川英雄）。

研究業績関連説明書

論文1 「戦後の日本語教育における思想的「連続性」の問題－日本語教科書に見る「国家」「国民」「言語」「文化」

【要旨】

本研究は、日本語教科書の通時的な内容分析と作成者の論考の批判的検討から、戦後の日本語教育において、「国家」「国民」「言語」「文化」がいかに捉えられてきたのかを明らかにした。

「日本人のように日本語が話せるようになりたい」などと学習者の視点などを利用しながら巧妙に「日本語＝日本人」という考え方が提示されてきたこと、また、「日本」「日本人」「日本語」「日本文化」のそれぞれの境界が固定化され、同一性を兼ね備えた「統一体」として想定されてきたことを指摘した。教科書の分析と作成者の論考から見えてきたこうした「日本語＝日本人」という思想は、戦前のものと同一のものとはいえないが、依然として、戦後の日本語教育において継承されていることが明らかとなり、本論文ではそうした流れを批判的に論じた。

【関連】

本論文は博士論文の第2章「在日コリアン教師のライフストーリー研究への視座」の中の第1節1.3の一部にあたる。博士論文では、本論文をもとに、さらに広く「日本語＝日本人」という思想について考察した。

論文2 「「カテゴリー」化されることへの拒絶とその戦略的利用－在日コリアンとして生まれ育った在韓日本語教師の「日本語」の意味づけをめぐる語りを手がかりに」

【要旨】

本研究は、従来の研究では着目されてこなかった、韓国に渡った「在日コリアン」の日本語教師へのライフストーリーの聞き取り調査から、その生活史がいかなるものであったのかを捉えたものである。旧宗主国のことばである「日本語」を「母語」とし、それを旧植民地である韓国において教えるということがどのような意味をもつのかにも着目した。調査から明らかになったのは、「日本語」を「母語」とするがゆえに多くの困難や葛藤に直面しつつも、「限られた社会進出の道具」の一つとして、かつ、自分たちの生まれ育った生活空間である「日本」との何らかの繋がりを維持するためのものとして「日本語」を捉え直し、「戦略」的に利用しながら、韓国社会でのポジションを模索している教師たちの姿であった。

【関連】

本論文は博士論文の第4章の構想のもとになったものである。「単一民族」という考え方では捉えきれない教師の属性、そして、彼らの言語意識や言語経験をもとに「言語」と「国籍/血統」のズレの問題を論じ、その意味を考察するという研究課題は本論文の執筆を通じて明確になった。

論文3 「「日本語＝日本人」という規範からの逸脱－「在日コリアン」教師のアイデンティティと日本語教育における戦略」

【要旨】

本研究は、在韓の「在日コリアン」日本語教師のライフストーリーから、「日本語＝日本人」という規範が根強い日本語教育において、その規範からの逸脱者がどのように自己を位置づけてきたのかを明らかにしたものである。インタビューの結果、社会生活においては、「在日コリアン」というカテゴリーで括られたアイデンティティを拒絶しているにもかかわらず、日本語教育の現場においては、日本語ネイティブの「在日コリアン」であることを強く表明していることが明らかとなった。そうした戦略を使わざるを得ない教師の前には、たとえ日本語のネイティブであっても、「日本語ネイティブ教師＝日本人教師」という図式からは逸脱しているために疎外されてしまう現実があることがわかった。このことから、「日本人性」が付与された「日本語」の存在とそれを容認する日本語教育の実態が示唆された。

【関連】

本論文は博士論文の第4章第1節の「在日コリアン」教師のライフストーリーの分析・考察部分の一部である。本論文を【事例1】とし、博士論文では本論文で得られた考察結果をもとにさらに調査を行い、【事例2】～【事例4】を加筆した。